

キャリア教育が大学生の自己形成に及ぼす影響

—基礎的・汎用的能力に関する大学生の自己認識を通して—

The Influence of Career Education on Self-Formation
of University Students:
Through Their Self-Awareness of Basic and General Capability.

小川 潔

Kiyoshi OGAWA

岡田 大爾

Daiji OKADA

『広島国際大学 教職教室 教育論叢』

“*Hiroshima International University Journal of Educational Research*”

ISSN:1884-9482

第10号 抜刷

Off Print of the 10th Edition

広島国際大学 教職教室

Issued by Hiroshima International University Teacher Education Unit

2018年12月

December, 2018

キャリア教育が大学生の自己形成に及ぼす影響

—基礎的・汎用的能力に関する大学生の自己認識を通して—

広島国際大学 教職課程 非常勤講師 小川 潔
広島国際大学 教職教室 岡田 大爾

要旨：「キャリア教育」は社会の現状を考えると必要な教育だと言われる。本研究では、学校教育と職業生活の円滑な接続に繋がるキャリア形成に基づくキャリア発達、つまり、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度の育成に係る理論的背景¹に基づき実践状況を究明する。そこで、まず職場体験やインターンシップの実施状況及び認識状況を分析し、基礎的・汎用的能力に着目して、職業観・勤労観、職業に関する知識や技能、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度等に係る自己形成について検討した。次に小学校・中学校・高等学校において、キャリア教育を受けてきた大学生は、どのような学習内容・活動で、どのような力を身に付けたと実感し、自己形成をどのように認識しているのか調査した。その結果、職場体験及びインターンシップの意義や学びの自己認識状況について、差異が認められた。また、基礎的・汎用的能力の肯定的評価として「人間関係形成・社会形成能力」88.9%、「自己理解・自己管理能力」77.3%、「課題対応能力」85.6%、「キャリアプランニング能力」82.9%が認められ、特に低い「自己理解・自己管理能力」に及ぼす能力の要素を見出した。

はじめに—問題の所在—

平成11(1999)年12月に中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」(答申)において、キャリア教育の意義が示されて以来、文部科学省が中心になり、キャリア教育に関わる答申や報告書が次々に発表され、方策が打ち出されてきた。それを受けて、各学校では独自のキャリア教育実践の具現化がなされてきている^{2,3}。キャリア教育の必要性や意義も高まり実践の成果も高まる一方、キャリア教育の捉え方、実践の内容・水準にばらつきのあることも課題となっている⁴。

そこで、実際に大学生が小学校・中学校・高等学校で受けたキャリア教育について、身に付いた力を、どう実感し自己形成しているか、その実態を明らかにする。まず、職場体験やインターンシップの実施状況を調査する。次に、基礎的・汎用的能力に着目して、職業観・勤労観、職業に関する知識や技能、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度等を、いかに身に付け、その力を、どのように実感し、概念形成しているか、その学生間の差異を明らかにする。

1. 研究方法

1.1 調査対象の学生について

職場体験及びインターンシップに係る調査対象は、第一著者(小川)が担当する共通科目「教育

学」の受講学生である。学部構成は表 1 に示す。平成 29 年度後期受講の 60 名である。

表 1 調査対象の学部構成

	男	女	計
保健医療学部	4	2	6
総合リハビリテーション学部	12	4	16
医療福祉学部	1	3	4
医療経営学部	0	1	1
心理学部	14	15	29
看護学部	1	3	4
計	32	28	60

1.2 調査用紙について

授業において、教育課程、学習指導要領、総合的な学習の時間、協同的な学び、職場体験及びインターンシップについて学ぶ中で、大学生の中・高等学校における授業を振り返る演習を行った。職場体験及びインターンシップの実施状況を学生自身の実感から捉えるために、まず、職場体験及びインターンシップの体験の有無、実施学年、実施日数に関する質問項目の回答によって行った。次に、職場体験及びインターンシップについての自由記述によって、意義や学びの認識状況及びその深さに着目した。

さらに、「基礎的・汎用的能力」について、大学生の中・高等学校における体験状況を把握するため、アンケートを実施した。アンケートの質問項目は、文部科学省「中学校キャリア教育の手引き（改訂版）」^{5,6,7}の「キャリア教育アンケートの一例」を基に、①から⑫の質問項目を4段階評定尺度法で行った。

2. 結果と考察

2.1 職場体験及びインターンシップの体験状況

職場体験及びインターンシップの体験の有無を表 2 に示す。職場体験の経験有りは 53 人 (88.3%)、未経験者は 7 人 (11.7%) であった。インターンシップの経験有りは 4 人 (6.7%)、未経験者は 56 人 (93.3%) であった。職場体験未経験者 7 人の内、インターンシップも体験していない学生は 5 人 (8.3%) であった。国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「平成 28 年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果(概要)」(平成 31 年 1 月)において、国・公・私立高等学校(全日制・定時制・通信制)におけるインターンシップ実施率は 国立では 21.1% 公立では 82.7%, 私立では 46.0% である。職場体験実施率については、公立中学校で 98.1%, 国立では 64.0%, 私立では 30.0% であった。これらの結果と比べると、インターンシップの未経験者が極めて多いことが認められた。

表 2 職場体験及びインターンシップの体験状況

	体験(有り)	体験(無し)
職場体験	53人 (88.3%)	7人 (11.7%)
インターンシップ	4人 (6.7%)	56人 (93.3%)

※ 職場体験未体験者 7 人中, 5 人はインターンシップも未体験(8.3%)

実施学年については表3に示す。職場体験では2年生での実施が一番多く75.5%であった。次に3年生実施が18.9%であった。インターンシップでは、4人中2人が2年生で経験していることが認められた。中学校・高等学校において2年生実施の傾向が認められた。

表3 実施学年

(左：職場体験, 右：インターンシップ)

1年	2	3.8%	1年	1
2年	40	75.5%	2年	2
3年	10	18.9%	3年	1
計	52	98.1%	計	4
不明	1	1.9%		

実施日数については表4に示す。職場体験では、5日が一番多く(24.5%), 続いて3日(20.8%), 2日(19.9%)であった。インターンシップでは2日が多かった。

表4 実施日数

(左：職場体験, 右：インターンシップ)

1日	5	9.4%	1日	1
2日	10	18.9%	2日	2
3日	11	20.8%	3日	1
4日	2	3.8%	4日	0
5日	13	24.5%	5日	0
6日	1	1.9%	6日	0
7日	9	17.0%	7日	0
10日	1	1.9%	10日	0
計	52	98.1%	計	4
不明	1	1.9%		

平成20年中学校学習指導要領解説特別活動編, 平成21年学習指導要領解説特別活動編には、「教育的な意義が一層深まるとともに、高い教育効果が期待されることなどから、学校の実態や生徒の発達の段階を考慮しつつ、一定期間(例えば1週間(5日間)程度)にわたって行われることが望まれる。」とあるが、今回の大学生の中・高当学校の教育体験調査では、学校間のばらつきが認められた。

職場体験, インターンシップは、学校教育全体として行うキャリア教育の一環として位置づけ、自己の能力, 適性等についての理解を深め、職業や進路, 生き方にかかわる啓発的な体験が行われるようすることの重要性をしっかりと受け止めた実践が求められる。

2.2 職場体験及びインターンシップの意義及び学びの認識状況

メタ認知とは、自己の認知活動を客体化して評価し、それらの活動を制御することであり、キャリア教育においては重要な要素であり、学び方を学ぶときには必要となる。心理学者のデーモンとハートが提唱した自己理解に特有の発達的なモデル（1982年）の中で、対象としての自己を身体的自己、行動的自己、社会的自己、心理的自己の基本要素に分解し、発達段階に応じてその中心が移ることを示している⁸。

<職場体験> ※自由記述無し・・・1人（1.9%）

自己認知的学び	26人 49.1%	<ul style="list-style-type: none"> ・動きの難しさ、季節ごとの管理のため休みがない。 ・裏方の仕事の細やかさ、大変さ、頑張り（目に見えない裏）を知った。 ・大人は挨拶、面倒見る体力が必要である。 ・思った以上に仕事は大変だった ・人とふれあうことの楽しさを学んだ（思いやり、笑顔、感謝）。 ・サービス業として様々な工夫がなされていると感じた ・コミュニケーション、仕事を見つけるが必要である。
メタ認知的学び	22人 41.5%	<ul style="list-style-type: none"> ・裏方の役割や重要さを学んだ。一つのミスが大きい損害を生むので大変だと実感した。人の命に関わるため職場の空気だけで責任の重さを感じた。 ・異年齢の人とコミュニケーションを通じ、その仕方を身に付け、人間関係能力を高め、職業や仕事の世界を具体的に学び自らの進路に役立った。 ・職業や仕事に対する理解を深め、職業生活に必要な知識技能を習得した。 ・挨拶、言葉遣い、時間厳守など、職業生活、社会生活に必要なマナーやルール、勤勉さや責任感などを身に付け、社会人、職業人としての資質能力態度を高めることを学んだ。
社会・情緒的学び	4人 7.5%	<ul style="list-style-type: none"> ・適性の理解、自己理解を深め、自らの将来について夢や憧れを持つことができた。仕事を具体的現実的に理解できたので職業の選択に役立てる。 ・将来の生き方や進路に対する関心を高めることができた。具体的現実的に考える貴重な機会であった。より一層看護師になる強い思いとなった。

<インターンシップ>

自己認知的学び	1人	<ul style="list-style-type: none"> ・人をサポートすることは大変だと思った
メタ認知的学び	2人	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の長所を見出し、自己の能力、適性の理解など自己理解を深めた。 ・挨拶、言葉遣い、時間厳守等、職業生活、社会生活に必要なマナーやルール、勤勉さや責任感等、身に付け、社会人・職業人としての資質能力を高めて頂いた。
社会・情緒的学び	1人	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉使いやマナーを知った。地域のために何がよいか改善点・活性化に「自分たちができること」を考えた。

図1 職場体験及びインターンシップに係る学びの認識段階

このことから職場体験やインターンシップのメタ認知にかかわる活動についても発達的に考え、体験を体験だけに終わらすのではなく、意義や学びの認識儒教を把握する必要がある。そこで、自己を表面的に見つめる自己認知的な段階（自己認知的学び）、自己の思考や行動を分析するメタ認知

的な段階(メタ認知的学び),メタ認知による自分の思考パターンの把握・制御へと進む段階(社会・情緒的学び)の3段階について,職場体験やインターンシップの意義や学びの認識状況を分類することを試みた(図1)⁹。

職場体験では,自己を表面的に見つめる自己認知的学びの段階は49.1%,自己の思考や行動を分析・自己評価するメタ認知的学びの段階は41.5%,自分の思考パターンの把握・制御し社会的・情緒的学びの段階7.5%であった。ほぼ半数が自己認知レベルに止まっている。メタ認知レベル前の種々の体験の客体化は認められた。4割の学生は自己の思考や行動を分析・評価し,自分にとっての問題の発見及び自分の見方や考え方を見つめ直す経験を自己評価しているメタ認知レベルが認められた。そして,1割未満が,自分が体験したことを生かし,社会や地域貢献への意欲を高めたり,次なる挑戦を抱く等の生き方の変容となるメタ認知により社会的・情緒的学びの認識レベルが認められた。また,インターンシップも差異は認められ,より高い認識レベルが見出された。

2.3 基礎的・汎用的能力の自己認識状況

基礎的・汎用的能力の自己認識状況を図2に示す。「自己理解・自己管理能力」の肯定的評価が77.3%であり,他の能力「人間関係形成・社会形成能力」88.9%,「課題対応能力」85.6%,「キャリアプランニング能力」82.9%と比較して低い値であった。また,各能力における要素を比較すると,「自己理解・自己管理能力」に含まれる“前向きに考える力,主体的行動”の項目の肯定的回答が最も低く68.1%であった。

次に低いのは,“忍耐力,ストレスマネジメント”の項目で75.0%であった。肯定的評価の高い要素は,「人間関係形成・社会形成能力」に含まれる“他者の個性を理解する”の肯定的評価が最も高く97.2%であった。

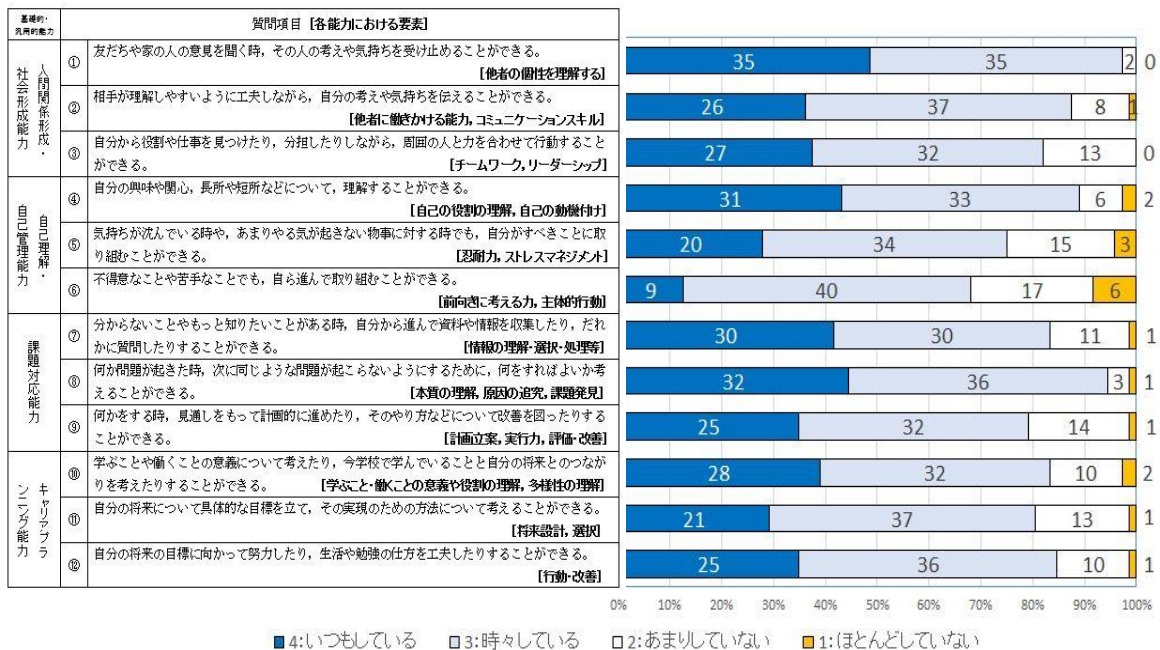


図2 基礎的・汎用的能力の自己認識状況

体験学習等を通して、自己理解を進め、自己の考え方や思考のパターンを認知することによって、自己の行動を制御・決定していく能力を育てる必要がある。進路選択など自分の将来について、主体的に判断するとき、自分がどのように考え、何を判断しようとしているのか、自己認識するメタ認知能力は必要である。自分の考え方や特性と現実の状況を客観的に見ることができなければ、自分に都合のよい情報ばかり集めたり、自分を否定する情報ばかり集めたりするなど、極端に偏った情報収集をしてしまうことになる。メタ認知の能力が、物事を前向きに考える思考・行動力や主体的な進路選択には非常に重要になってくるのである。

「自己理解・自己管理能力」の要素である”前向きに考える力・主体的行動”に対する各要素の関連性を図3に示す。小・中・高等学校の日常生活（授業中や放課後）を振り返った実感について、「いつもしている」を4、「時々している」を3、「あまりしていない」を2、「ほとんどしていない」を1の四段階評定尺度法で行い、「前向きに考える力・主体的行動」の「いつもしている」、「ほとんどしていない」に対する各要素の平均値を質問項目の番号に沿って示している。

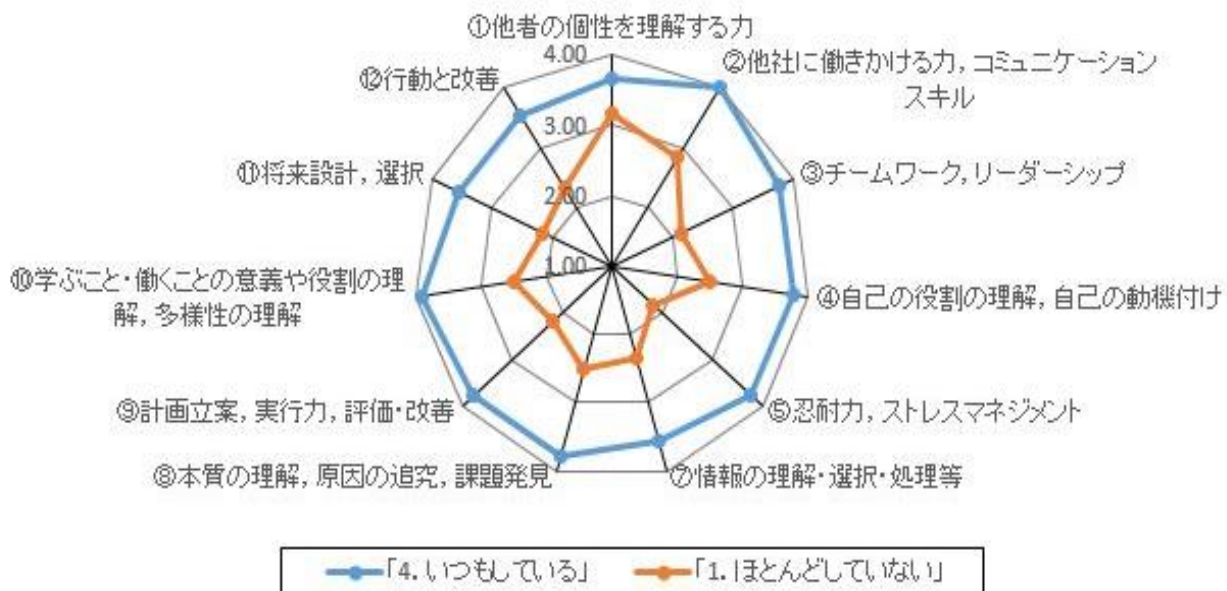


図3 「前向きに考える力, 主体的行動」と各要素との関係

「やればできる」と考えて行動できる力、自らの思考や感情を律する力や自らを研鑽する力は、キャリア形成や人間関係形成における基盤となるものであり、とりわけ自己理解能力は、生涯にわたり多様なキャリアを形成する過程で常に深めていく必要がある。気持ちが沈んでいる時やあまりやる気を起さない物事に対する時でも、落ち込む自分を立て直し自分がすべきことに取り組むことができるといった“忍耐力、ストレスマネジメント”が身に付いたとする実感に差異が大きいことが認められた。

これに対し、“他者の個性を理解する力”については差異が最も少なく、“他者に働きかける力、

コミュニケーションスキル”の差異も少ないことが認められた。多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えること、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ、他者と協力・協働して社会に参画していく積極的な社会性の形成につながる力については、多くの学生が実感していることが認められた。

おわりに—まとめと今後の課題—

キャリア教育は、生徒に将来の生活や社会、職業等との関連を意識させ、キャリア発達を促すことから、「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、幅広い地域住民等と目標やビジョンを共有し、「生きる力」に結びつく社会的・職業的自立に必要な基礎的・汎用的能力の育成が連携・協働して図ることが期待されている。本研究においても、大学生の人格形成が図られ、その意義及び自己効力感についての様々な自己認識が見出された。

- (1) 職場体験の経験率 88.3%、インターンシップの経験率 6.7%が認められた。経験した学生は、地域や事業所等の職場の大人との出会いや仕事内容を通して、自分の適性や将来の自分と向き合った結果、3段階の自己認識レベルと質的差異が見出された。
- (2) 基礎的・汎用的能力の自己効力感に係る肯定的回答は、「人間関係形成・社会形成能力」88.9%、「自己理解・自己管理能力」77.3%、「課題対応能力」85.6%、「キャリアプランニング能力」82.9%と、多くの学生が身に付いたと実感していることが認められた。
- (3) 「自己理解・自己管理能力」に影響のある要素として“前向きに考える力、主体的行動”の関連性が見出された。“他者の個性を理解する力”、“他者に働きかける力、コミュニケーションスキル”は比較的差の無いことが認められた。

(1)から(3)より、望ましい勤労観・職業観を育む発達の段階にある生徒が、自分自身を見つめ、自分と社会とのかかわりを考え、将来、様々な生き方や進路選択の可能性があることの理解と共に、自らの意思と責任で自己の生き方、進路を選択困難な状況を乗り越えていく経験を積み重ね、自己認識の深化を図る工夫が重要である。

そのために、主体的な学び、対話的な学び、深い学びに関する要素“前向きに考える力、主体的行動”を意図的・計画的に指導し、よりよく確実な発達を促すことが重要である。主体的な活動への意欲をもたせ、自己実現に必要な資質や能力、態度を身に付け、共に学び、活動することを通して自己存在感や自己実現の喜びを感じる生活を築かせる。

課題としては、発達段階に応じた課題を克服する成功体験や失敗を乗り越える回復体験をできるだけ多く体験できるような学習の場面をつくることである。本研究においても、キャリア教育の理念が浸透し、基礎的・汎用的能力が身に付いたと実感する大学生が多い一方で、「働くこと」の現実や必要な資質・能力の育成につながる経験を積み上げていない学生も存在することが認められた。

- (4) 職場体験 11.7%，インターンシップ 93.3%の未経験率が見出され、両方未経験率は 8.3%が認められた。体験した作業や職場の人との会話の内容とそれらから感じたこと、体験を通して実感した自分自身の適性や長所短所、将来に向けての可能性や不安、悩み、自己と社会双方の多様な気付きや発見等を様々な角度から見つめる機会がなかった。
- (5) 自己認知的学びの段階 49.1%，メタ認知的学びの段階 41.5%，社会的・情緒的学びの段階 7.5%と、体験及び学びの質に差異が認められた。体験の意味を問うことなく、表面的な体験あるいは貴重な体験で終わるのでなく、社会の仕組み、働くことの意味を学びに定着させる社会的・情緒的学びの段階に高める省察や視点形成の必要がある。
- (6) 「自己理解・自己管理能力」の要素である“前向きに考える力・主体的行動”に影響を及ぼす“忍耐力、ストレスマネジメント”，“チームワーク，リーダーシップ”，“計画立案，実行力，評価・改善”の負に影響する自己効力感の差異が認められた。これらは「主体的・対話的な深い学び」に相当することから、個々の思考とその論理性及び言語活用力、視点形成、社会性・情緒的な認識状況等の把握・改善・向上が必要である。

(4)から(6)より、キャリア教育を効果的に展開していくためには、特別活動の学級活動を要とし、総合的な学習の時間や学校行事、道徳科や各教科における学習等、学校の教育活動全体を通じて必要な資質・能力の育成を図っていく取組が重要になる。自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら見通しをもったり、振り返ったりする機会と場を設定し、自分や他人及び社会を客観的に見て認識を深め、学ぶことの重要性を考える視点をコントロールできる力の自己形成が求められる。

そのために、まず、企業や地域社会に、発達段階に応じたキャリア教育の意義や目的、身に付けさせたい力等の理解と協力が得られる働きかけ、就業体験学習等の啓発的な経験の機会を与える必要がある。次に、様々な視点から自分にかかわる状況を見つめる経験を取り入れ、視点の切り替えを意識させる学習活動を組み立てる。そして、他人の生き方や考え方に共感、重ね合わせ、比較することによって、自己の考え方を客観的に評価し、社会と自分との関係を深く認識し、自分なりの社会貢献を創造・想像する視点形成を育成する。これらを達成するために、社会的にも情緒的にも豊かな自己認識と価値形成を確立した人格形成を目指すことが重要である。

引用・参考文献

- 1) 小川 潔, 岡田大爾「キャリア教育と基礎的・汎用的能力の重要性—特別活動を要とした教育課程編成を通して—」『広島国際大学 教職教室 教育論叢』第10号, pp.11-19. 2018.
- 2) 国立教育政策研究所 (<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/sinro/1hobun.pdf>)「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」, pp.1-55, 平成14(2002)年
- 3) 内閣府人間力戦略研究会 (<http://www5.cao.go.jp/keizai1/2004/ningenryoku/0410houkoku.pdf>)「人間力戦略研究会報告書」, pp.1-28, 平成15(2003)年
- 4) 中央教育審議会 (http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」, pp.1-100, 平成23年1月.
- 5) 文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」(平成23年)教育出版, pp.64-65, 平成23年
- 6) 文部科学省「小学校キャリア教育の手引き <改訂版>」(2011年5月)教育出版, 平成23年
- 7) 文部科学省 (http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/11/04/1312817_20.pdf)「高等学校キャリア教育の手引き」(2011年11月)教育出版, pp.129-131, 平成23年
- 8) W. デーモン著〔山本多喜司訳〕(1990)『社会性と人格の発達心理学』北大路書房, pp.1-492. Pp.420-426
- 9) A. オリヴェリオ著〔川本英明訳〕(2007)『メタ認知的アプローチによる学ぶ技術』創元社, pp.1-301. pp.229-261.